

東京学芸大学探検部員の 海外探検とセミナー開催

～80年代後半から90年代前半を中心に～

元冒険探検部員(現在・毎日新聞社勤務)
日比野真士

自己紹介①(1989年インド＝18歳初の海外旅行で赤痢に)

◆過去の伝染病の歴史、現代のコロナにつながる「差別」を身をもって体感



2 3039

指 示 書
INSTRUCTIONS

交付年月日 平成元年/12月/17日
Date of Issue

To: 日比野 圭士 殿

小 様 は、貴 殿 対 し 下 記 の 理 由 に よ り、検 疫 法 第 十 八 条 の 規 定 に 基 き、
次 の と お り 指 示 し ま す。

1 平成元年/12月/6日までに健康状態に異状を生じたときは、すみやかに最寄りの保健所又は医療機関で診察を受けること。

2 次の事項に注意しましょう。

(その他の検疫伝染病予防上の必要な事項)

(1) 手洗の励行 (2) 調理仕事 (3) 外出や多数の人が集合する場所

The following instruction is hereby given to you in accordance with the provision of Article 18 of the Quarantine Law by the under-mentioned reasons.

1 To receive medical examination at the nearest health center or other medical facilities if any abnormal symptoms are recognized in your health condition by (day) _____ (month) _____

Be careful of the followings

(1) Keep your hands clean. (2) Cooking service.

2 (3) Travel etc.

(Other necessary matters for the prevention of quarantinable disease)

理 由 由 (コロナ汚染地域) から来航し 日前 下痢症状等を呈していたため。

Reasons: (Corona contaminated area) from arrival N. days

氏 名 印 日比野 圭士 N. S.
Signature

成 田 空 港 検 疫 所 長

自己紹介①(1989年インド＝K類国際教育研究の研修旅行)

◆南北格差における貧困や差別、教育の大切さへの意識が芽生え始める

※88年に新設された0免課程は2015年に教育支援課程に発展的解消 ※私大系の学生も学大に



自己紹介②(1990年ソ連＝研修旅行の自主企画)

- ◆新潟ーハバロフスクー(シベリア鉄道)ーイルクーツクー中央アジア(タシケント・サマルカンド)ーモスクワ・レニングラードーハバロフスクー新潟
- ◆91年崩壊前のソ連の様子を分離前の中央アジアも含め「何でも見てやろう」精神で
- ◆当時のソ連は外国人旅行者の受け入れに制限あり。自由旅行プランを手配できる旅行会社も少なかった。



自己紹介(在学中の経歴)

1989年4月:東京学芸大学入学(K類国際文化教育課程国際教育専攻)

10月:同課程でインド研修旅行(約10日間)

1990年5月頃:冒険探検部(通称:ボータン)入部

1990年10月:同課程でソ連旅行(約10日間)

→以後約5年間ソ連・東欧関係の旅行会社でアルバイト

1991年11月～92年2月:連続講演会「アジアを考えるⅡ」開催

1993年4月:東京学芸大学大学院入学(生涯教育専攻・・・のち中退)

1993年6～8月:中央アジア学術調査隊

1993年9月:済州島調査冒険隊

1996年4月:毎日新聞社入社、現在知的財産ビジネス部門に在籍

海外渡航・遠征の系譜①(80年代前半)

- 1981・2 <冒険探検部> 創立
- ・ 9-10 ネパール・アンナプルナ登頂隊に部員派遣
- 1982・4 バングラディッシュでの農村開発活動に部員派遣
- ・ 10 ヨーロッパ・ドイツ巡見に部員派遣
- 1983・9-10 部員が自転車でオーストラリア大陸横断
- ・ 10 トルコ東部アララト山塊調査に部員派遣
- 1984・2-3 第1次中国遠征（部員・一般参加者計18名）
- ・ 8 中国引き揚げ者子弟日本語学校（江戸川区）夏の野営会に部員4名参加
- ・ 10 韓国遠征隊第1次予備調査
- ・ 10 中国国慶節記念行事に部員参加
- 1985・2-4 部員パキスタン・イランを自転車で縦断・調査
- ・ 3-4 第2次中国遠征（部員・一般参加者計6名）

海外渡航・遠征の系譜②(80年代後半)

- 1985・6 <自然文化誌研究会冒険探検部> 創立
- ・6 「インドネシア・プロジェクト」発足
- 「国際留学生のつどい」主催
- ・9-10 インドネシア学術探検(インドネシア・プロジェクト) 第1回予備踏査隊派遣
- ・10-1986-3 フィリピン第1次調査会員派遣
- 1986・2-3 韓国調査 会員派遣
- ・3 インドネシア・プロジェクト第一次隊派遣
- ・3-4 第3次中国遠征(会員・一般参加者計11名)
- ・5 マラソン報告会「アジアは今」第1～7回開催(インドネシア・韓国・中国・フィリピン)
- 1987・3-4 第4次中国遠征(会員・一般参加者計19名)
- ・8 青年海外協力隊員として会員がガーナへ渡航
- ・8 イギリスの野外活動学校(OBS)に会員参加
- 1988・3-4 第5回中国遠征(会員・一般参加者計12名)
- 1988・5 第6回野外教育セミナー開催
- ・11-12 連続講演会「アジアを考える」開催

海外渡航・遠征の系譜③(90年代前半)

- 1990・9-10 部員バりに渡航
 - ・9-10 部員ボルネオに渡航・調査・登山
 - ・12-1991・1 部員インドネシア・アルー諸島に渡航・調査
 - 1991・11-1992・2 連続講演会「アジアを考えるII」開催
 - 1993・6-8 中央アジア学術調査隊 JTクロスカルチャア賞を獲得し 中央アジアへ
 - ・9 済州島調査冒険隊 済州島へ
- (以上、20周年記念誌「らぞう」から)

海外渡航・遠征の系譜④(90年代半ば～2000年代)

1994-95頃	部員ヨーロッパに渡航
同上	部員中国に渡航
同上	部員イスラエルに渡航
同上	部員中央アジアに渡航
1996・8-10	部員ペルー、ポリビアに渡航
1996・8-10	部員インドに渡航
1997・4-98・3	部員ブラジルで日本語教師に(1年間)
1999.3	部員タイ、ベトナムに渡航
1999.4	部員スリランカに渡航
1999.6	部員フィンランドに渡航
1999・12-2000・1	部員オーストラリア・ニュージーランドに渡航
2003.9	インドネシアイカダ計画偵察
	(以上、「冒探王」vol.6-11から)

冒険・探検の活動記録①(「冒探王」)

1987年 創刊号



1987年 2号



1988年 3号



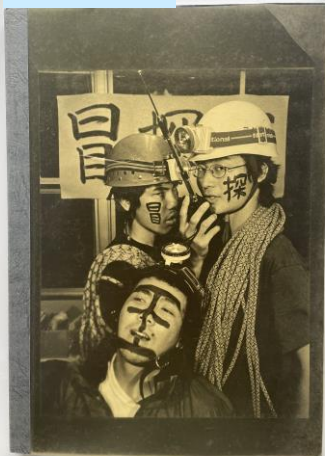
1996年 6号



1997年 7号



2002年 8号



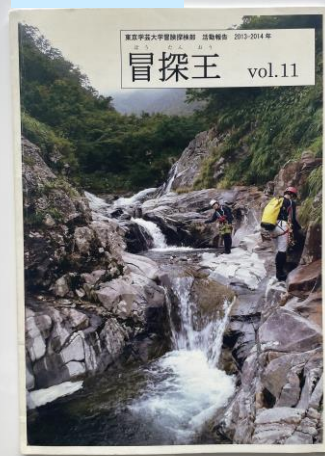
2005年 9号



2007年 10号

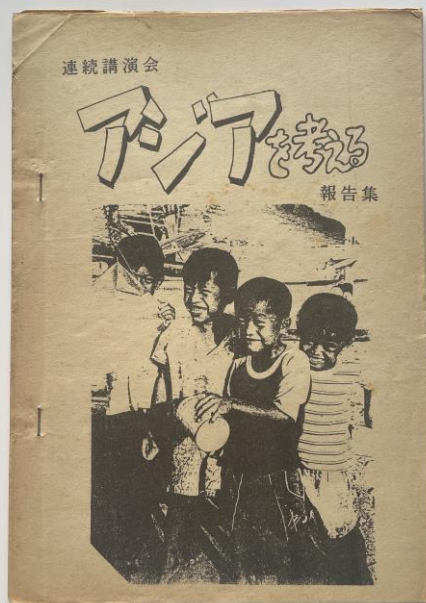


2015年 11号

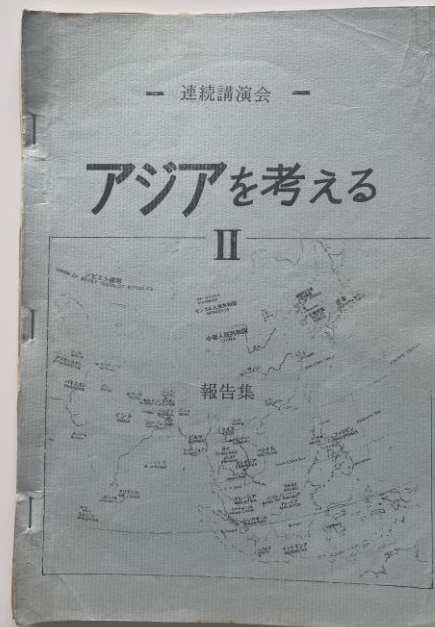


冒険・探検の活動記録②(「アジアを考える」「済州島」)

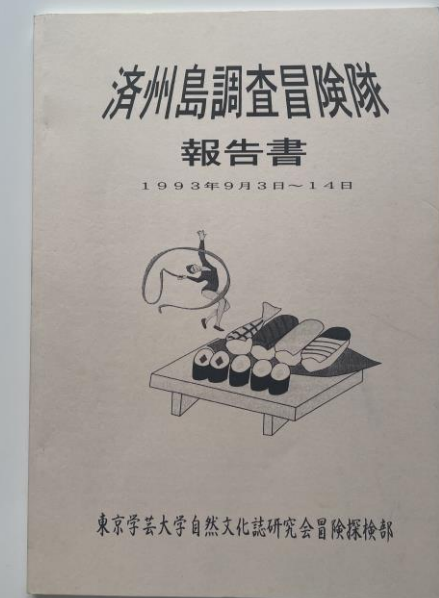
1990年



1992年



1995年



中央アジア学術調査隊(1993年6月18日～8月17日)

◆第1回JTクロスカルチャー大賞受賞：賞金1000万円！！

中央アジア学術調査隊のメンバー

隊長	木俣美樹男	附属野外教育実習施設助教授(自然文化誌研究会理事、冒険探検部顧問)
顧問	北野日出男	第3部理科教育学研究室教授(自然文化誌研究会顧問)
	石橋隆明	(財)森とむらの会事務局長(自然文化誌研究会顧問)
隊員	中込貴芳	都立江東養護学校教諭(自然文化誌研究会理事)
	日比野慎士	大学院1年生涯教育専攻(自然文化誌研究会冒険探検部)
	福留友子	大学院1年アジア研究専攻(自然文化誌研究会冒険探検部)
	叶田真規子	学部4年文化財科学専攻(自然文化誌研究会冒険探検部)
	須藤真	学部3年自然史専修(自然文化誌研究会冒険探検部)

<各隊員のテーマ>

西トルキスタンにおける穀物の栽培と利用	木俣美樹男
西トルキスタンの自然環境	北野日出男
西トルキスタンの食文化	叶田真規子
中央アジアにおける住文化	福留友子
伝統技術と生活における美意識	中込貴芳
ウズベク共和国の就学前教育——キチキントーイ保育・幼稚園の事例をもとに	日比野真士



中央アジア学術調査隊(1993年6月18日～8月17日)

調査地の概略図



<報告書>



<経費資料>



中央アジア学術調査隊(1993年6月18日～8月17日)

◆中央アジアの平原を調査隊を乗せたバスが進む。めぼしい地点で隊長が停車指示し採取活動



中央アジア学術調査隊(1993年6月18日～8月17日)

◆ホテルの部屋で昼間採取した標本の整理



中央アジア学術調査隊(1993年6月18日～8月17日)

◆バザールでの採取、聞き込みも重要な調査活動のひとつ



中央アジア学術調査隊(1993年6月18日～8月17日)

◆調査の合間の木陰での昼食と休息。各地での歓待。昼間からのウォッカとの闘い。



韓国済州島調査冒険隊(1993年9月3日～14日)

- ◆92、93年の新入生大量入部
- ◆部全体での久々の海外遠征企画(総勢15人)
- ◆現地では漢拏山登山(1947メートル)以外は調査対象に分かれ班別行動
- ◆東京から下関までの徒歩組も

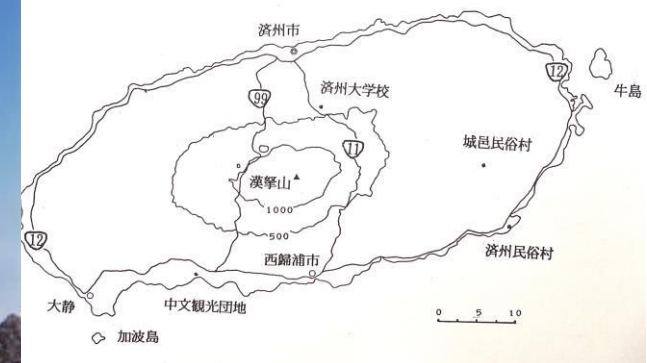
済州島図



行動日程

- 9月 3日 JR東京駅集合、東海道本線で移動、車中泊
- 4日 JR広島駅着、広島大学薫風寮泊
- 5日 JR線の下関へ移動、JR下関駅で協田、丸岡合流、下関フェリーターミナルへ移動、出国、乗船
- 6日 釜山着、市内散策、釜山フェリーターミナルから乗船
- 7日 済州島着、済州市内散策、情報収集
- 8日 市内散策、情報収集、済州大学校日本語科の学生の方々と交流、山行準備
- 9日 漢拏山登山、山中泊
- 10日 下山、通訳の方々と打ち合わせ
- 11日 班別活動
- 12日 班別活動
- 13日 済州市で合流、反省会
- 14日 解散

※2007年「済州火山島と溶岩洞窟群」が韓国初の世界自然遺産に登録



韓国済州島調査冒険隊(1993年9月3日～14日)

◆各班での調査内容

- ①「トル・ハルバン」成因調査
- ②「民泊」調査
- ③「本貫と同姓同本」に関する意識調査
- ④洞窟調査
- ⑤済州島自転車1周

※メンバーの中にK類アジア研究の大学院生らがいたこともあり、民俗学・文化人類学的な調査手法、テーマ設定が特色であった。

※済州大学校日本語学科学生の皆さんに通訳などをお願いした。

韓国済州島調査冒険隊(1993年9月3日～14日)

①「トル・ハルバン」成因調査

済州道「トル・ハルバン」成因調査

東京学芸大学教育情報科学科 三間 祥江
東京学芸大学教育情報科学科 立川 信史

- I. はじめに
(1) 「トル・ハルバン」とは
(2) 調査の動機と目的
II. 調査内容
(1) 先行研究(6月16日～
9月3日)
(2) 調査方法(9月11日～
9月13日)
III. 調査報告
(1) 現地での行動と内容
(2) 考察
IV. おりがき
(1) 後の課題
(2) 調査を終えて
V. 参考文献



- I. はじめに
(1) 「トル・ハルバン」とは

韓国国内でも、済州島にしか見られない大きな目玉で三頭身のユーモラスな怪石人像が「トル・ハルバン」である。「トル」は石、「ハルバン」はお爺さんという意味をもつ。大きさは、1m～2m程あり、大抵、野ざらして野外に置かれ

表1. 済州牧城の石像の規格(空欄は資料なし) (cm)

像	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	平均
全身長	156	170	183	227	162	203	192	196	145	146	172	156	212	190	182	322	220	148	150	194	161	181.6
頭長	80	83	98	107	94	95	89	85	77	78	78	84	82	96	85	100	105	82	90	98	83	89.0
頭周	128	139	166	175	135	112	153	145	125	125	124	130	162	183	160	164	175	140	168	154	168	149.1
胸周	157	164	242	252	141	163	175	202	178	156	157	158	160	205	232	221	02	205	161	175	222	196.6
帽子幅	11	11	11	13	11	10	11	13	12	11	9	10	12	14	12	10	10	12	10	11	10	11.1
帽子周	152	148	183	186	146	154	146	142	138	136	124	140	162	176	163	176	161	169	164	172	157.2	
基石高					48	35								56			37	35				42.2
基石周					345	300								282			312	374				322.6

表2. 大静縣城の石像の規格(空欄は資料なし) (cm)

像	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均		
全身長	115	134	140	160	162	156				140	130	105	136	137	136.2
頭長	63	58	68	76	77	80				67	60	64	53	66	66.5
頭周	164	135	142	162	173	175				150	123	134	132	136	147.8
胸周	193	160	156	188	203	197				175	147	154	165	145	171.2
帽子幅	6	7	6	7	7	8				8	5	4	5	5	6.2
帽子周	167	139	160	173	175	181									
基石高															
基石周															

表3. 旌義縣城の石像の規格

像	1	2	3	4	5	6
全身長	134	155	132	121	142	156
頭長	61	70	60	58	60	70
頭周	147	154	121	134	144	181
胸周	163	190	155	150	160	202
帽子幅	4	6	5	5	4	5
帽子周	140	157	116	125	125	155
基石高	24	18	16	36	44	40
基石周	200	240	240	186	218	240

*いずれも済州道史の資料



韓国済州島調査冒険隊(1993年9月3日～14日)

②「民泊」(民家の空き部屋を訪問者に提供する形態) 調査

表1、咸徳海水浴場を訪れた観光客数と民泊利用者数

	済州道	うち民泊利用者数		咸徳里	うち民泊利用者数
1992	3,400,000	59,000	1.7%	1992.8	7,910
					3,385
				1993.8	12,311
					3,495
					28.4%

<済州道に関する数字は概数、済州道に関しては済州島観光協会の調査より、咸徳里に関しては朝天邑事務所の調査より作成>

表2、済州島の宿泊施設(1992)

	ホテル・その他		旅館		旅人宿		民泊	
	個所	客室数	個所	客室数	個所	客室数	個所	客室数
済州市	90	5,510	202	3,455	181	1,937	5	11
西歸浦市	19	1,925	72	1,425	27	232	2	7
北済州郡	2	137	24	291	10	62	139	440
南済州郡	0	0	27	519	7	58	48	171

<済州道観光協会調べ>

表3、各民泊経営家庭の状況

建物	新築数	経営年数	家族構成					収入・その他
			夫	妻	息子	娘	夫	
A	中	4	20	◎N	◎N	●	○	ミカン 0.3ha
B	新	5	8	◎K	◎K	●	●	
C	新	2	3	△	◎K	○	○	
D	新	5	18	ON	◎N	○	△	ミカン 1.0ha
E	中	3	18	◎	◎	△	△	
F	中	5	10	ON	◎	△	△	銀行員時代の貯金で生活 ミカン(まだ出荷不可)
G	新	1	0	○	◎	●	○	
H	中	10	20	◎	◎	●	●	母と息子夫婦は別家計
I	中	10	20	◎N	◎	△	○	ミカン 0.3ha
J	中	6	10	◎N	◎N	●	●	野菜
K	中	3	10	ON	◎	●	●	ミカン(まだ出 農業手伝い)
L	中	5	6	◎N	◎N	●	●	ミカン 親夫婦と息子夫婦
M	中	7	3	△	◎	○	○	親夫婦と息子夫婦

N	中	5	2	◎N	●	○	母と息子夫婦は別家計 ミカン、野菜 たまに農作業手伝い
O	中	2	5	◎	●	●	子供からの仕送り有り
P	新	2	1	◎	○	△	未登録 長男の会社員時代の貯金と、か つて行っていた事業の収入で生 活
Q	旧	4	13	△	●	●	子供からの仕送り有り 未登録

(3) 家屋、部屋と民泊業

図3は咸徳里の一般的な家屋の間取りである。部屋の広さは約3～6畳のが普通である。設備は布団、オンドルのほか、テレビや鏡がついている部屋に鍵はない。ごくたまに、民泊客専用台所や便所、風呂が付設して

表3の建物の項の「中」「旧」に該当、一階建

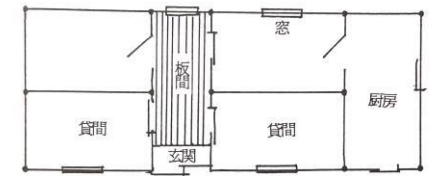


表3の建物の項の「中」「旧」に該当、一階建

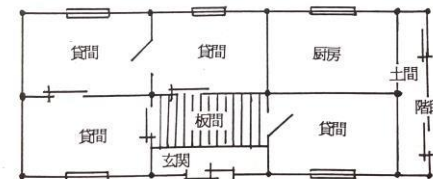


表3の建物の項の「新」に該当、二階建、図は一階

図3、民家の間取りの一例

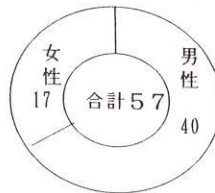
<脇田原図>

韓国済州島調査冒険隊(1993年9月3日～14日)

③「本貫と同姓同本」に関する意識調査： 57名へのアンケート

※韓国では、名字を表す「姓」と、そのなかでも始祖の発祥を表す「本貫」により、氏族集団が明らかにされており、かつては(93年当時も)、同姓同本の結婚は民法で禁止され(一部特例法あり)、忌避される傾向があった。2005年に「8親等以内の親族との婚姻を禁ずる」と民法が改正された。

資料分析は次章で行なうこととし、ここでは基礎的データを挙げる。
被調査者の性別



全体：57人
男性：40人……約7割
女性：17人……約3割

年齢

年齢	男性	女性	合計
0～30	21	11	32
31～45	7	2	9
46～60	5	2	7
61以上	6	2	8
無回答	1	0	1
全体	40	17	57

(人)

宗教

宗教	男性	女性	合計
仏教	14	5	19
キリスト教 (天主教)	7	6	13
無し (宗教ではないが)	17	6	23
儒教	2	0	2
全体	40	17	57

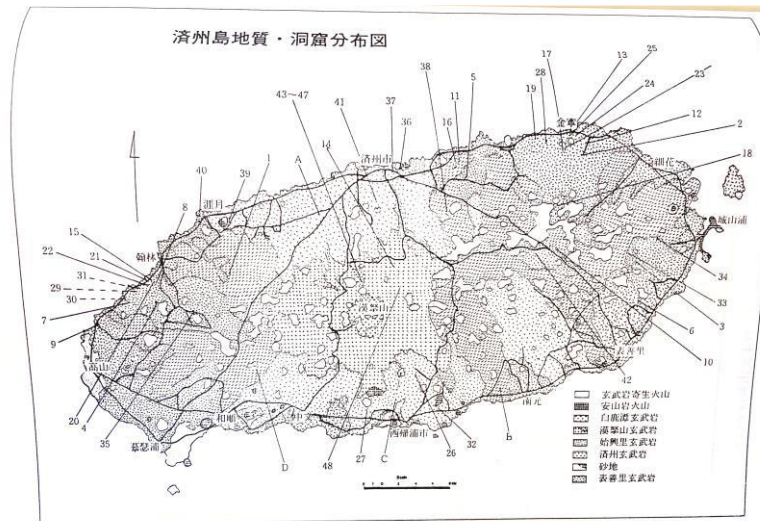
(人)

なお、韓国では年齢を数え年で数えるため、ここに掲げる結果は一歳の誤差を含む。

韓国済州島調査冒険隊(1993年9月3日～14日)

④洞窟調査

済州島は世界有数の溶岩洞窟の場所で120を超える溶岩洞窟が存在する。93年調査時には「美千窟(1695メートル)」や旧日本軍防空壕などの測量調査を行った。



連続講演会「アジアを考えるⅡ（1991年11月～92年2月）」

- ▷セミナーや連続講演会の企画・開催が学芸大冒険探検部のひとつの特徴
- ▷なぜアジアだったか／南北問題・環境問題・民族問題・人権問題を通して／「日本」を見つめ直す視点

＜連続講演会「アジアを考えるⅡ」開催＞ のべ150人が参加

第1回「開発教育とは」寺尾明人氏（開発教育協議会）

第2回「多民族国家・日本－在日外国人問題の現状と課題」

阿久澤麻理子・榎井縁氏（財）神奈川県国際交流協会）

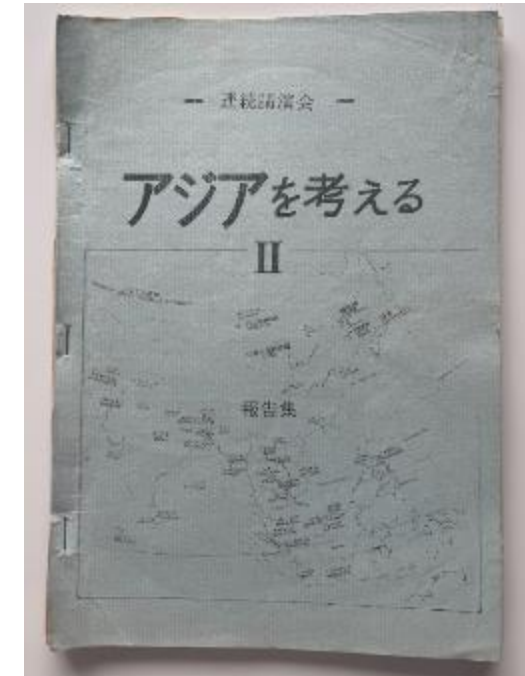
第3回「マレーシア－多民族社会の構図」梶谷鋭氏（東洋大学大学院）

第4回「東南アジアにおける森林伐採問題とわたしたち」

市井晴也氏（サラワク・キャンペーン委員会）

第5回シンポジウム「在日韓国・朝鮮人とわたしたち」

& 朝鮮大学校生交流会



連続講演会「アジアを考えるⅡ(1991年11月～92年2月)」

連続講演会：「アジアを考えるⅡ」

今、日本においてアジアの問題に
実際にたずさわっている
行動派の人々が語る！

地球社会は経済・政治・文化の様々な面でボーダーレスとなりつつある。私達は日本人として物質的に豊かな生活を享受しているが、その“豊かな生活”の拠り所は何であるのかグローバルな視点でとらえ直さなければならぬ時期にきている。そこで我々探検部員がフィールドとして活動し、問題関心の中心となっている「アジア」に特に着目し、日本とアジアに関する時事的な問題を通して日本人としてアジアの一員としてアジアを考え、そしてアジアを見つめ直すことによって「日本」を考える、という主旨で5回にわたって講演会を行う。

《内容》

第1回：11月24日(日)14:00-16:00

『開発教育とは』講演者：寺尾明人氏(開発教育協議会)

現在、地球上の貧困と南北格差の様相と原因を学習し、またその解決のために自ら参加しようという態度を育んでいくことを目的とする《開発教育》という新しい理念の教育活動の必要性が叫ばれている。この《開発教育》についての理念と実践、問題点などについて語っていただく。

第2回：1月22日(水)17:00-19:00

『多民族国家・日本—在日外国人問題の現状と課題』

講演者：阿久澤麻理子氏・榎井 緑氏(豊神奈川県国際交流協会)

現在日本には様々な外国人が生活しているが、彼らはそれぞれ日本で生活していくうえで多くの困難や問題を抱えている。神奈川県内の在日外国人の実態を調査しながら、在日外国人のケアに日夜努力を続けているお二人にわたしたちがあまり知らない在日外国人の実態、それに対する課題について語っていただく。

第3回：1月29日(水)17:00-19:00

『マレーシア—多民族社会の構図』

講演者：舩谷 鋭氏(東洋大学大学院)

ご存じのとおりマレーシアは複合民族国家として知られている。それゆえに複雑なマレーシアの社会構造の様相、また文化誌などについて華人のコミュニティを中心に舩谷氏スライドを用いながら語っていただく。

第4回：2月5日(水)17:00-19:00

『東南アジアにおける森林伐採問題とわたしたち』

講演者：市井 氏(サラワク・キャンペーン委員会)

東南アジアにおける熱帯雨林の濫伐問題はマスコミに頻りに取り上げられているが、こうした情報をただ知識として受け取るだけでなく私達日本人が熱帯雨林の最大の消費者であり、問題解決のためには私達一人一人が努力していかなければならないことを自覚する必要がある。今回は東南アジアにおける森林伐採問題の現状と日本との関わりについて語っていただく。

第5回：2月18日(火)15:00-18:00

シンポジウム『在日韓国・朝鮮人と私たち』

&朝鮮大学校生交流会

パネリストとして朝鮮大学校の学生を迎え、在日韓国・朝鮮人問題、朝鮮民主主義人民共和国の問題、日本人との共生などについてディスカッションを進める。また日本人学生と朝鮮大学校の学生との交流会も予定している。

連続講演会「アジアを考えるⅡ(1991年11月～92年2月)」

講演会

「開発教育とは」

講師：寺尾明人氏（開発教育協議会）
 日時：11月24日(日) 14:00～16:00
 場所：東京学芸大学・20周年記念会館2階
 (正門入ってすぐ左手)
 入場料：¥200 (資料代)



主催：東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部・国際教育研究会

問い合わせ先：サークル新棟4F冒険探検部部室または
 ☎0423(86)0503 (K 国際教育研究・日比野真土)

連続講演会「アジアを考えるⅡ」
 第2回

「多民族国家・日本 —在日外国人問題の 現状と課題—」

講師：滋神奈川県国際交流協会・
 阿久澤氏、榎井氏

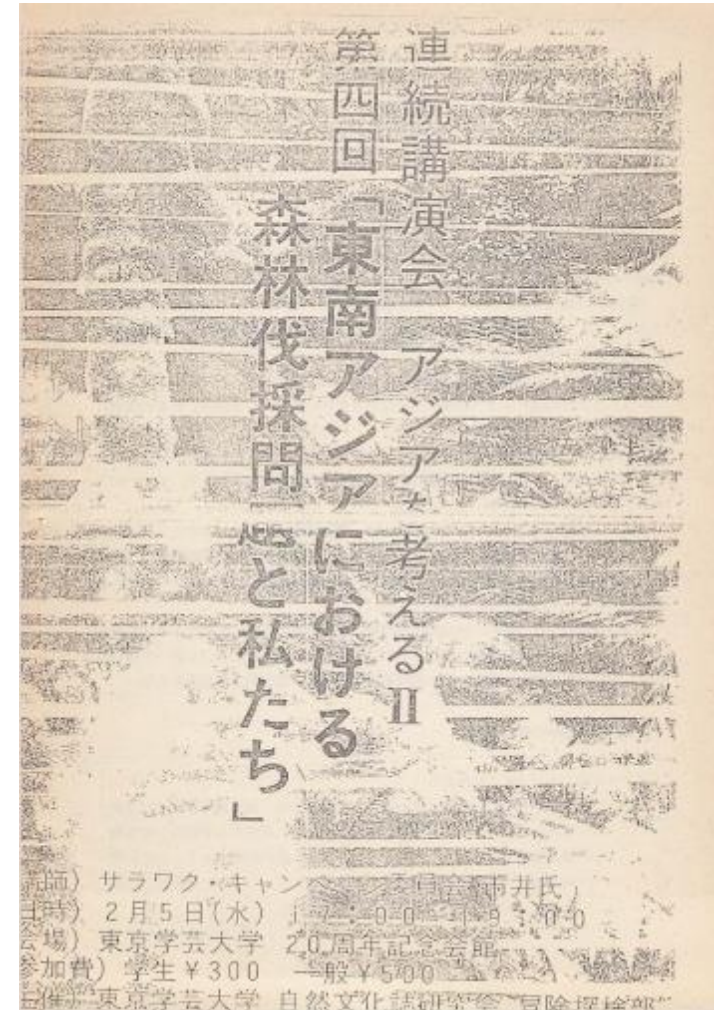
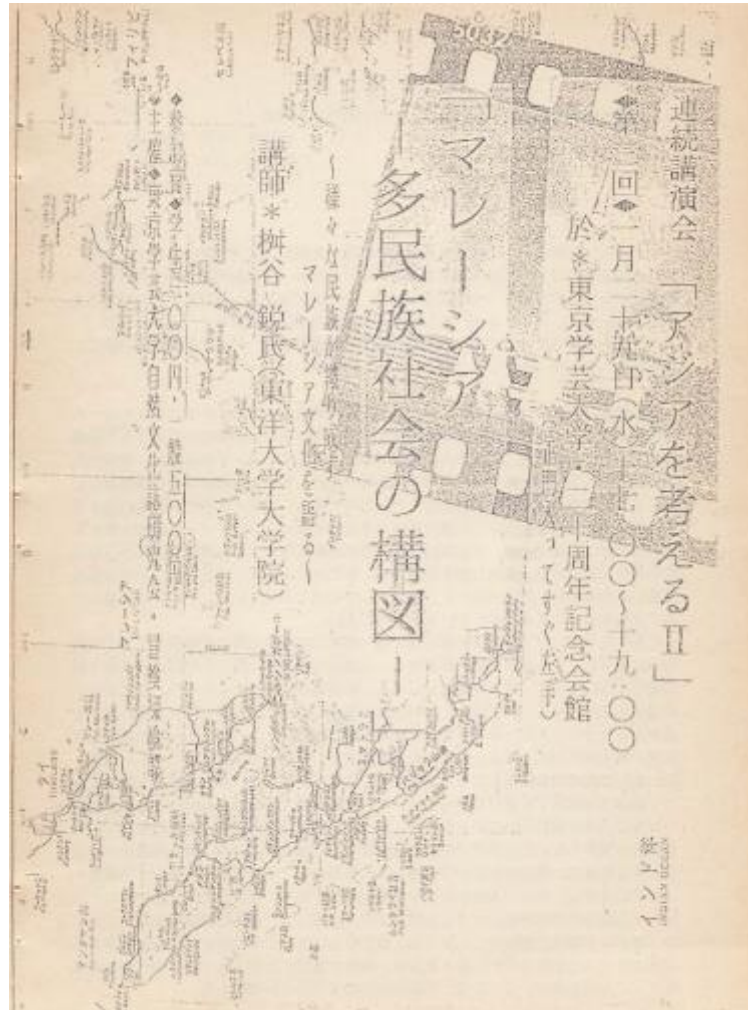


日本に暮らす多くの外国人
 彼らの息吹を
 感じることが出来ますか？

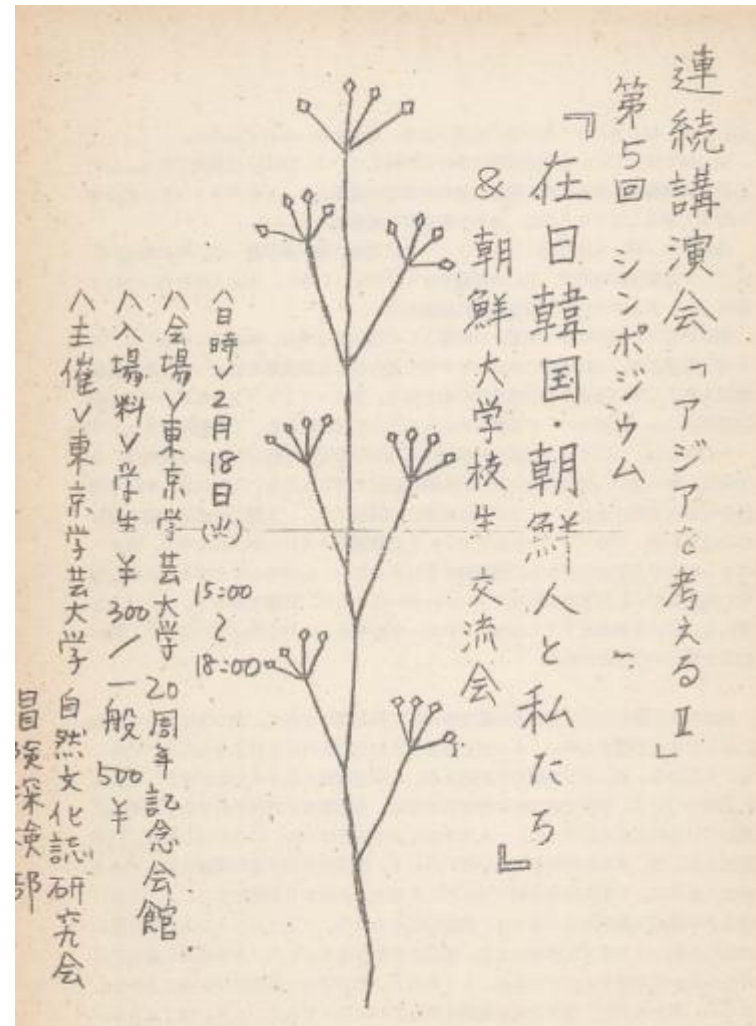
日時：1月22日(水) 17:00～19:00
 会場：東京学芸大学・20周年記念会館
 (正門入ってすぐ左手)
 JR中央線：武蔵小金井駅北口よりバスで10分、徒歩20分
 JR中央線：摂分駅北口より徒歩20分
 参加費：学生¥300／一般¥500
 主催：東京学芸大学自然文化誌研究会
 冒険探検部

問い合わせ先：榎留 友子 ☎0425(76)0173(呼)

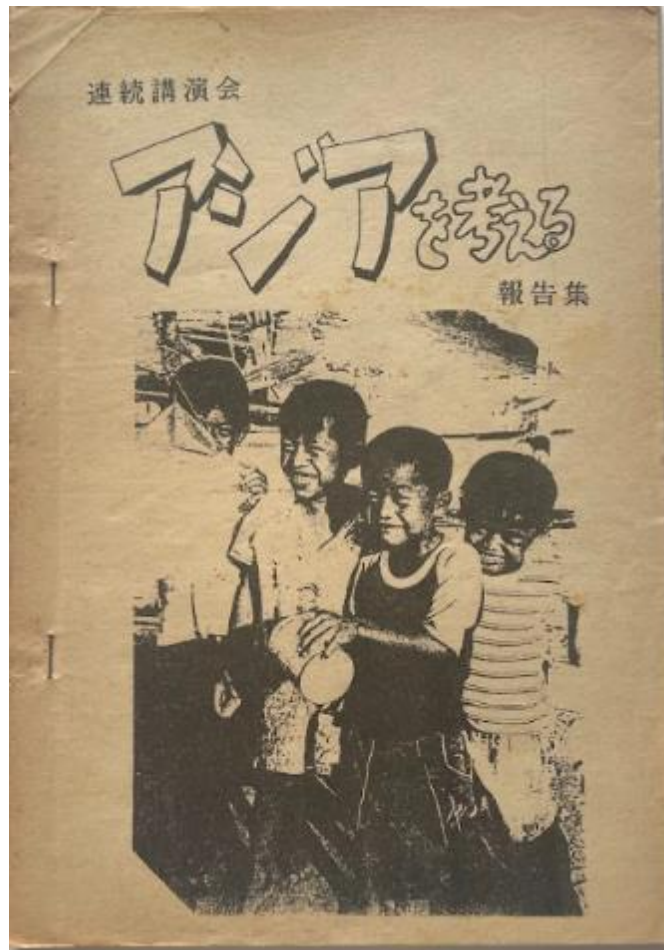
連続講演会「アジアを考えるⅡ(1991年11月～92年2月)」



連続講演会「アジアを考えるⅡ(1991年11月～92年2月)」



連続講演会「アジアを考える(1989年11月～12月)」



影響を受けてきた書籍①(学生時代)



影響を受けてきた書籍②(社会人)



海外渡航・遠征の系譜①(80年代前半)

- | | |
|-----------|----------------------------------|
| 1981・2 | <冒険探検部> 創立 |
| ・ 9-10 | ネパール・アンナプルナ登頂隊に部員派遣 |
| 1982・4 | バングラディッシュでの農村開発活動に部員派遣 |
| ・ 10 | ヨーロッパ・ドイツ巡見に部員派遣 |
| 1983・9-10 | 部員が自転車でオーストラリア大陸横断 |
| ・ 10 | トルコ東部アララト山塊調査に部員派遣 |
| 1984・2-3 | 第1次中国遠征(部員・一般参加者計18名) |
| ・ 8 | 中国引き揚げ者子弟日本語学校(江戸川区)夏の野営会に部員4名参加 |
| ・ 10 | 韓国遠征隊第1次予備調査 |
| ・ 10 | 中国国慶節記念行事に部員参加 |
| 1985・2-4 | 部員パキスタン・イランを自転車で縦断・調査 |
| ・ 3-4 | 第2次中国遠征(部員・一般参加者計6名) |

1961年 小田実著「何でも見てやろう」刊行

1964年 海外渡航自由化

1968年 本多勝一著「冒険と日本人」刊行

1970年 アサヒグラフで藤原新也「インド発見・100日間」写真特集

1971年 植村直己著「青春を山に賭けて」刊行

1972年 藤原新也著「インド放浪」刊行

1972年 年間海外渡航者数100万人突破

1978年 成田空港開港

1979年「地球の歩き方(ヨーロッパ編/アメリカ・カナダ・メキシコ編)」創刊

1981年「同(インド・ネパール編)」刊行

1983年「同(中国自由旅行編)」刊行

1984年 産経新聞で沢木耕太郎氏「深夜特急」連載開始

海外渡航・遠征の系譜②(80年代後半)

- 1985・6 <自然文化誌研究会冒険探検部> 創立
- ・6 「インドネシア・プロジェクト」発足
- 「国際留学生のつどい」主催
- ・9-10 インドネシア学術探検(インドネシア・プロジェクト) 第1回予備踏査隊派遣
- ・10-1986-3 フィリピン第1次調査会員派遣
- 1986・2-3 韓国調査 会員派遣
- ・3 インドネシア・プロジェクト第一次隊派遣
- ・3-4 第3次中国遠征(会員・一般参加者計11名)
- ・5 マラソン報告会「アジアは今」第1～7回開催(インドネシア・韓国・中国・フィリピン)
- 1987・3-4 第4次中国遠征(会員・一般参加者計19名)
- ・8 青年海外協力隊員として会員がガーナへ渡航
- ・8 イギリスの野外活動学校(OBS)に会員参加
- 1988・3-4 第5回中国遠征(会員・一般参加者計12名)
- 1988・5 第6回野外教育セミナー開催
- ・11-12 連続講演会「アジアを考える」開催

1986年 年間海外渡航者数500万人突破

1986年 新潮社「深夜特急(第一便・第二便)」刊行

1989年 天安門事件

1989年 ベルリンの壁崩壊

海外渡航・遠征の系譜③(90年代前半)

- 1990・9-10 部員バりに渡航
 - ・9-10 部員ボルネオに渡航・調査・登山
 - ・12-1991・1 部員インドネシア・アルー諸島に渡航・調査
 - 1991・11-1992・2 連続講演会「アジアを考えるII」開催
 - 1993・6-8 中央アジア学術調査隊 JTクロスカルチャア賞を獲得し 中央アジアへ
 - ・9 済州島調査冒険隊 済州島へ
- (以上、20周年記念誌「らぞう」から)

1990年 年間海外渡航者数1000万人突破

1991年 ソ連が崩壊

1991年 湾岸戦争始まる

海外渡航・遠征の系譜④(90年代半ば～2000年代)

1994-95頃	部員ヨーロッパに渡航
同上	部員中国に渡航
同上	部員イスラエルに渡航
同上	部員中央アジアに渡航
1996・8-10	部員ペルー、ポリビアに渡航
1996・8-10	部員インドに渡航
1997・4-98・3	部員ブラジルで日本語教師に(1年間)
1999.3	部員タイ、ベトナムに渡航
1999.4	部員スリランカに渡航
1999.6	部員フィンランドに渡航
1999・12-2000・1	部員オーストラリア・ニュージーランドに渡航
2003.9	インドネシアイカダ計画偵察 (以上、「冒探王」vol.6-11から)

1995年 年間海外渡航者数1500万人突破

1995年 Windows95発売

1999年 インターネット利用率21.4%

2001年 米国同時多発テロ事件(9.11)

2008年 iphone発売開始(日本)

2019年 年間海外渡航者数2000万人突破
(コロナにより減)

2024年 同1300万人

90年以降の動き: 冒険・探検に関する施設

「白瀬南極探検隊記念館」(秋田県にかほ市)1990年4月～

「植村冒険館」(東京都板橋区)1992年～

「最上徳内記念館」(山形県村山市)1993年～

「間宮林蔵記念館」(茨城県つくば市)1993年6月

「探検の殿堂～西堀栄三郎記念～EXPLORER MUSEUM」(滋賀県東近江市)1994年～

「植村直己冒険館」(兵庫県豊岡市)1996年～

「アースアカデミー大場満郎冒険学校」(山形県最上郡最上町)2001年～

「冒険研究所書店(店主＝北極冒険家・荻田泰永)」(神奈川県大和市)2021年5月～

90年以降の動き: 顕彰①植村直己冒険賞(1996年～)

第1回	1996年	尾崎隆「幻の山ミャンマー最高峰カカボラジ初登頂」
第2回	1997年	米子昭男「左腕を失うハンディを乗り越えヨットで大西洋・太平洋単独横断」
第3回	1998年	関野吉晴「人類の旅5万キロをたどるグレートジャーニーの冒険」
第4回	1999年	大場満郎「史上初の北極海単独横断と南極大陸約4,000キロの単独横断」
第5回	2000年	神田道夫「熱気球でヒマラヤ山脈・ナンガパルバット(8,125m)越えに成功」
第6回	2001年	中山嘉太郎「中央アジア・シルクロードを駆け抜ける」
第7回	2002年	山野井泰史・妙子「ギャチュンカン峰(7,952m)の登頂に成功」
第8回	2003年	安東浩正「日本人初の厳冬期シベリア単独自転車横断」
第9回	2004年	渡辺玉枝「女性世界最高齢で8,000m峰5座目となるローツェに登頂」
第10回	2005年	永瀬忠志「リヤカーを引き世界各地を徒歩踏破4万3千キロ」
第11回	2006年	小松由佳「K2に日本人女性初登頂」
第12回	2007年	野口健「エベレストに北稜(中国側)から登頂成功」
第13回	2008年	該当者なし(被選出者の辞退のため)
第14回	2009年	中西大輔「11年かけ自転車地球2周15万キロ」
第15回	2010年	栗秋正寿「中央アラスカ山脈83日間に及ぶハンター冬季単独登頂に挑戦」
第16回	2011年	斉藤実「ヨットで単独「最高齢(77歳)・最多(8回)」世界一周達成」
第17回	2012年	竹内洋岳「14Project(ダウラギリに無酸素登頂し、8,000m峰14座完登)」
第18回	2013年	田中幹也「厳冬期カナダで自身の可能性に挑み続け19年・2万2千キロ踏破」
第19回	2014年	該当者なし(被選出者の辞退のため)
第20回	2015年	本多有香「極北の原野で犬たちと暮らし、マッシュャー(犬ゾリ使い)となる夢を実現 ～北米二大犬ゾリレース完走～」
第21回	2016年	平出和也「アルパインクライマー、山岳カメラマンの二刀流で活動中(8,000m峰5座、エベレスト3回登頂)」
第22回	2017年	荻田泰永「南極点無補給単独徒歩到達」
第23回	2018年	岡村隆「『未知』の遺跡探査に情熱を傾けて約半世紀、南アジア密林遺跡探検調査」
第24回	2019年	岩本光弘「全盲のハンディキャップを抱えながらも太平洋横断」
第25回	2020年	稲葉香「秘境の地西チベット厳冬のドルポ越冬122日間」
第26回	2021年	阿部雅龍「白瀬ルートによる南極点単独徒歩到達に挑戦」
第27回	2022年	野村良太「積雪期単独北海道分水嶺縦断」
第28回	2023年	山田高司、高野秀行「イラクの巨大湿地帯(アフワール)探検」 田中彰、大西良治「ヒマラヤ・アンナプルナ山群の大渓谷「セティ・ゴルジュ」探検」
第29回	2024年	吉田勝次「ラオスの人跡未踏の洞窟を探検」

90年以降の動き: 顕彰②開高健ノンフィクション賞(2003年～)

- 第1回(2003年) - 平岡泰博『虎山へ』(集英社)。
- 第2回(2004年) - 廣川まさき『ウーマンアローン』(集英社)。
- 第3回(2005年) - 藤原章生「遠い地平」
- 第4回(2006年) - 伊東乾『さよなら、サイレント・ネイビー: 地下鉄に乗った同級生』(集英社)
- 第5回(2007年) - 志治美世子『ねじれ: 医療の光と影を越えて』(集英社)。
- 第6回(2008年) - 石川直樹『最後の冒険家: 太平洋に消えた神田道夫』
- 第7回(2009年) - 中村安希『インパラの朝: ユーラシア・アフリカ大陸684日』(集英社)
- 第8回(2010年) - 角幡唯介「空白の五マイル: 人跡未踏のチベット・ツアンポー峡谷単独行」
- 第9回(2011年) - 水谷竹秀「日本を捨てた男たち: フィリピンでホームレス」
- 第10回(2012年) - 佐々涼子『エンジェルフライト: 国際霊柩送還士』(集英社)。
- 第11回(2013年) - 黒川祥子「壁になった少女: 虐待-子どもたちのその後」
- 第12回(2014年) - 田原牧『ジャスミンの残り香: 「アラブの春」が変えたもの』(集英社)。
- 第13回(2015年) - 三浦英之『五色の虹: 満州建国大学卒業生たちの戦後』(集英社)。
- 第14回(2016年) - 工藤律子『マラス: 暴力に支配される少年たち』(集英社)。
- 第15回(2017年) - 畠山理仁『黙殺: 報じられない“無頼系独立候補”たちの戦い』(集英社)。
- 第16回(2018年) - 川内有緒『空をゆく巨人』(集英社)。
- 第17回(2019年) - 濱野ちひろ『聖なるズー: 動物性愛者、種も暴力も超えるセックス』
- 第18回(2020年) - 河野啓『デス・ゾーン: 栗城史多のエベレスト劇場』(集英社)。
- 第19回(2021年) - 平井美帆『ソ連兵へ差し出された娘たち: 証言・満州黒川開拓団』
- 第20回(2022年) - 佐賀旭『虚ろな革命家たち: 連合赤軍森恒夫の足跡をたどって』(集英社)。
- 第21回(2023年) - 青島顕『МОСТ(モスト): 「ソ連」を伝えたモスクワ放送の日本人』(集英社)
- 第22回(2024年) - 窪田新之助『対馬の海に沈む』(集英社)

90年以降の動き: 顕彰③梅棹忠夫・山と探検文学賞(2011年～)

- 第1回 2011年度: 角幡唯介著「空白の五マイル / 集英社」
- 第2回 2013年度: 中村保著「最後の辺境 チベットのアルプス / 東京新聞」
- 第3回 2014年度: 高野秀行著「謎の独立国家ソマリランド / 本の雑誌社」
- 第4回 2015年度: 中村哲著「天、共に在リーアフガニスタン三十年の闘い / NHK出版」
- 第5回 2016年度: 服部文祥著「ツンドラ・サバイバル / みすず書房」
- 第6回 2017年度: 中村逸郎著「シベリア最深紀行ー知られざる大地への七つ / 岩波書店」
- 第7回 2018年度: 大竹英洋著「そして、ぼくは旅に出た。 はじまりの森 / あすなろ書房」
- 第8回 2019年度: 佐藤優著「十五の夏 上下 / 幻冬舎」
- 第9回 2020年度: 荻田泰永著「考える脚 北極冒険家が考える、リスクとカネと歩くこと / KADOKAWA」
- 第10回 2021年度: 小野和子著「あいたくてききたくて旅にでる / 鎌谷書店」
- 第11回 2022年度: 川瀬慈著「エチオピア高原の吟遊詩人 うたに生きる者 / 音楽之友社」
- 第12回 2023年度: 山と溪谷社編「日本人とエベレスト / 山と溪谷社」

影響を受けてきた冒険家たち(影響を受けた順)

植村 直己(1941年生)

川口 浩(1936年生)

本多 勝一(1932年生)

沢木耕太郎(1947年生)

藤原 新也(1944年生)

網野 善彦(1928年生)

関野 吉晴(1949年生)

中沢 新一(1950年生)

高野 秀行(1966年生)

服部 文祥(1969年生)

「未知」への冒険

「TV」の冒険

「ジャーナリスト」の冒険

「文学(ノンフィクション)」の冒険

「写真(メントモリ)」の冒険

「歴史(日本)」の冒険

「人類」の冒険

「知」の冒険

「好奇心」の冒険

「サバイバル」の冒険

今、刺激を受けている冒険家たち

望月 新一 (1969年生)

熊谷 誠慈 (1980年生)

鈴木 俊貴 (1983年生)

「数学」の冒険

「生成AI(仏教)」の冒険

「動物言語学」の冒険

荻田 泰永 (1977年生)

「冒険書店」の冒険

学芸大冒険探検部の消滅・・・

◆2019年秋頃、残念ながら冒険探検部は部員がいなくなり、学芸大公式サークルとしては消滅してしまった・・・SNSが残るのみ

・ X (Twitter) : 2016年7月29日～2017年4月11日

https://x.com/gakugei_boutan

・ Facebook : 2011年11月26日～2015年10月22日

https://www.facebook.com/tguboutan/?locale=ja_JP

はて・・・

「大学探検部とは」

「社会人における冒険・探検とは」

継承すべきものがあるか、あれば何か

現代における「冒険・探検とは」／社会人としての「冒険・探検とは」

◆北極冒険家・荻田泰永さんの試み「冒険研究所書店（神奈川県大和市）」（2021年～）



● 店主 北極冒険家 萩田泰幸について

[illegible]

2021年に思い立ったように「雑誌」をはじめた。
なぜ書店を始めたのか?については著作「書店と冒険」にて、



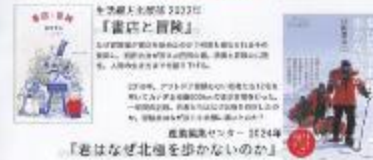
高田泰永のメデヤ了出演例

TBS「クレイジージャーニー」(30分主演) サンビッド「池田さんをおもてきた」
日本テレビ「世界まる見え!テレビ特捜部」 WBSHOW「ノゾミアクションW」
NHK「ニュースウォッチ9」 他、テレビ、ラジオ、雑誌など多数

學 苑田原永 著作



「GR!HOTEL 若松巻と歩く」
 若松巻は、江戸時代末の若松市（現・青森県）で、明治時代に入ると、日本橋・銀座・浅草・上野の4大遊園地として知られるようになった。その中でも、若松巻は、江戸時代から続く歴史ある遊園地として、多くの人々に愛されてきた。本書は、若松巻の歴史と文化を、写真と文で詳しく紹介する。また、若松巻の魅力を、最新の観光情報とともに、詳しく紹介する。本書は、若松巻の歴史と文化を、写真と文で詳しく紹介する。また、若松巻の魅力を、最新の観光情報とともに、詳しく紹介する。



「君はなぜ北嶺を歩かないのか」

※ ゲストを招いての対談トーク「冒険クロストーク」

梅片、ゲストを招いて秋田とじっくり対談を行うトークシリーズを開催。これまで、角田忠彦さん、有沢実るまさん、田中秀雄さん、野口雄三さん、藤田敦さんなど、ゲストにも顔を合わせてきた。会報とオンライン配信が主要



※ 極地訓練で使用した装備を展示

店員がお客様や商客での足音管理で使っていた装置を展示しています。
マキシンが通っているのは、2018年に興業大美術館開館後（日本入館）を
達成した際に実際に展示していた装置。勝利や目標達成の記念品メダルや
日本結晶賞大賞の表彰や旗なども展示しています。



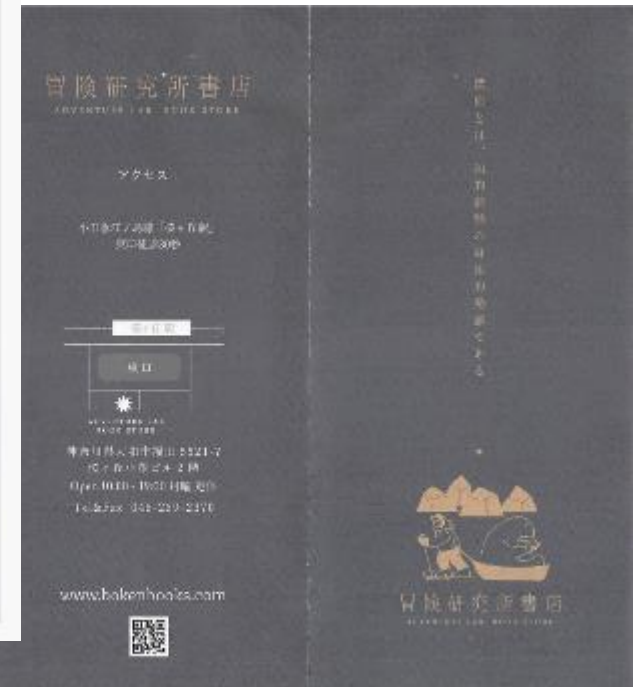
※ 古本と新刊を約5000冊

原稿の著作権は、著者と社刊を取り扱い、版権管理だけでなく、小説や絵本、ノンフィクション、写真集や人文書なども網羅しています。
 本のセレクトは、志生社刊自身により行われ、これまで読んで感銘を受けた本、これから読みたい本、ぜひ読んでほしい本を選びました。



※ 山小園書庫を店内に設置

2025年より店内に自社の展開の拠点を設置。手配りの信頼のやみに入ると、まるでそこは脱税基地。本の香りがするは中絶産婦では、脱ってコピーを数回ににちてきます。自利だけの世界で本を売買しにくが、



現代における「冒険・探検とは」／社会人としての「冒険・探検とは」

◆生成AI（Copilot）に聞いてみた・・・ここから分かることは



とても興味深い問いですね。「冒険」や「探検」という言葉は、かつては未踏の地を旅することや未知の自然を解明することを意味していましたが、現代においてはその意味が大きく変化しています。以下に、現代における冒険・探検の主な形をいくつか挙げてみます。

🌐 現代の「冒険」や「探検」のかたち

1. 極地・深海・宇宙の探査

- ・ 南極や北極、深海、宇宙など、依然として人類にとって過酷で未知の領域は存在します。
- ・ 例：宇宙飛行士の国際宇宙ステーション滞在、深海探査ロボットによる海底調査など。

2. 都市や社会の中の「探検」

- ・ 都市探検（Urban Exploration）：廃墟や立ち入り禁止区域を探検する活動。
- ・ 社会的な探検：異文化体験、未経験のコミュニティに飛び込むことも現代の冒険の一つ。

3. デジタル・バーチャルな冒険

- ・ 仮想現実（VR）やメタバース内での冒険体験。
- ・ ゲームやシミュレーションを通じて、現実では不可能な探検を体験する。

4. 内面的な冒険

- ・ 自己探求や精神的な成長を目的とした旅や挑戦（例：巡礼、瞑想リトリート）。
- ・ 心理的な限界に挑むことも、現代の「冒険」と言えるかもしれません。

5. 科学・技術のフロンティア

- ・ 人工知能、量子コンピュータ、バイオテクノロジーなど、知の最前線を切り拓く研究も「知的探検」としての冒険です。

🕒 現代の冒険者とは？

現代の冒険者は、必ずしも物理的な旅をする人だけではありません。未知に挑み、リスクを取り、世界や自分自身の理解を深めようとするすべての人が「冒険者」と言えるでしょう。